

[論文]

# 「やさしい日本語」講義がもたらした 学びの広がり

大学生への自由回答アンケート分析から

長谷川 頼子・井上 里鶴

## The Expansion of Learning Brought After “Yasashii-nihongo” Lectures

— An Analysis of a Free Answer Questionnaire to  
University Students —

HASEGAWA Yoriko / INOUE Rizu

“Yasashii-nihongo” is a type of Japanese that is simpler than regular Japanese, making it easier to understand for foreigners who are not very good at Japanese. “Yasashii-nihongo” is currently used in a wide variety of settings, and there are active efforts for its implementation by various ministries and agencies as well as local governments throughout Japan. These days when multicultural conviviality is being questioned, the time has come for the Japanese people, including the younger generation, to think proactively about “Yasashii-nihongo.”

In this study, we conducted a lecture on “Yasashii-nihongo” for university students, and examined their answers to three questions that they were asked afterward: Question 1: What did you learn from the lecture on “Yasashii-nihongo”? Question 2: What do you want to do in the future after listening to the lecture on “Yasashii-nihongo”? Question 3: What do

you want to learn more about regarding “Yasashii-nihongo”? These questions were asked in a free-text questionnaire, and data for a total of 108 students were obtained.

This data was subjected to quantitative text analysis by KH Coder. The answers to questions 1 and 2 had a commonality, and the contents of the answers were directly related to the lecture contents, such as the necessity of “Yasashii-nihongo” and the points of making Japanese more understandable. On the other hand, the answers to question 3 contained descriptions from various viewpoints that were not directly mentioned in the lecture. These included the state of Japanese language education in Japan, Japanese language education for foreign students, and training methods for teachers involved in school education.

These results show that questions that remind students of answers within the scope of the lecture content, such as questions 1 and 2, make students more conscious of the lecture content, and questions that allow them to think independently, such as question 3, also deepen and broaden students’ learning.

## 1. 研究背景と目的

### (1) やさしい日本語とは

やさしい日本語とは、普通の日本語よりも簡単で、外国人にも伝わりやすい日本語のことである。難しい言葉を簡単な言葉に言い換える、一文を短くする、漢字には振り仮名をつけるなど、いくつかのポイントがある。以下に例を示す。

(普通の日本語)

海や河口の近くで強い揺れを感じたときは、直ちに海岸や河口から離れ、高台や避難ビルなど高い場所に避難すること。

(やさしい日本語)

うみ おお じしん  
海で大きな地震があったとき、すぐ海や川から遠くに離れて、  
たか ばしょ い  
高い場所に行きます。

令和2年度「在留外国人に対する基礎調査」(出入国在留管理庁)より引用

上記は2020年9月に出入国在留管理庁が実施した「在留外国人に対する基礎調査」の一部である。日本語の「読む」について、上記2つの文の理解について尋ねた項目の調査結果によると、「よく分かる」と回答したのは普通の日本語では52.1%、やさしい日本語では77.2%であった。また、国立国語研究所が実施した「生活のための日本語：全国調査」では、定住外国人が「生活に困らない言語」として、「日本語」を選んだ人は62.6%、「英語」は44%であった。これらの調査結果からは、在留外国人への情報発信の言語選択は必ずしも英語ではないこと、より伝わりやすい日本語を考える上で、やさしい日本語が有効であると言える。

昨今、やさしい日本語の必要性に関する論考（庵ほか〔編〕〔2013〕、庵ほか〔編〕〔2019〕、庵〔編〕〔2020〕、岩田〔2016〕など）とともに運用面での整備が進められ、多くの場面で活用されている。各省庁や自治体などの情報発信、医療現場における対応、日常生活におけるコミュニケーションツールとしても用いられている。

一方、文化庁が実施した「令和元年度『国語に関する世論調査』」では、災害や行政に関する情報提供をやさしい日本語で伝える取組みについて知っているかどうかを尋ねる項目があった。その結果、「知っている」と回答したのは全体で約3割にとどまった。年齢別では特に、20代以下で「知らない」が7割台後半であり、他の年代より高い割合となっている。今後、若い世代にやさしい日本語をどう普及していくかが課題となっている。

## （2）先行研究（長谷川・井上〔2021〕）

筆者らは、若い世代、とりわけ大学生が、やさしい日本語の講義をどう受けとめるか、また、講義内容の構成によって受けとめ方に違いは見

られるのかに着目し研究を進めている。前稿（長谷川・井上〔2021〕）では、やさしい日本語の講義を受けた大学生から得た自由回答アンケートの結果をデータとして、計量テキスト分析の手法で検証を行った。

長谷川・井上（2021）では、まず2つの講義動画を作成した。表1に、各動画のトピックとキーワードを示す。1つ目の動画（以下、動画①）は、やさしい日本語の概念的説明が中心であり、2つ目の動画（以下、動画②）は、やさしい日本語の言語的規則の説明が中心である。いずれも約15分の動画となっている。

さらに、視聴の順番と受けとめ方の関係を探索的に分析するため、対象者の半数(A)は「動画① → 動画②」の順に、もう一方(B)は「動画② → 動画①」の順に視聴するように設定した。自由回答アンケートの質問項目全3つのうち、[問1 やさしい日本語の講義から何を学びましたか。]に対する回答を分析した結果、対象(A)(B)いずれも、2つの動画のうち「最初に視聴した動画」の内容を色濃く反映した受けとめ方であった。大学生は、何か新しいことを学ぶ際、導入の段階で受けた内容を基になるものとして受けとめ、そこから全体への理解や自分の考えを深めていく傾向があることが示唆された。このことから、長谷川・井上（2021）では、若い世代に、やさしい日本語の研修を行おうとする場合の研修の構成や、研修の計画段階における検討の必要性を指摘した。

表1 動画①および動画②のトピックとキーワード  
(長谷川・井上〔2021〕, p. 20)

動画①概念的説明	動画②言語的規則の説明
①やさしい日本語の定義、背景・必要性 ②活用例（自治体文書・医療現場・子どもや高齢者） ③英語より多くの外国人に伝わること ④外国人が直面する3つの壁（制度の壁・言葉の壁・心の壁） ⑤在留資格、多言語対応、日本語教育の機会の提供 ⑥多文化共生、外国人とのコミュニケーション	①やさしい日本語の定義 ②作り方の5つのポイント ・ゆっくり最後まではっきり話す ・一文を短く ・簡単な言葉を使う（漢語は和語に、具体例を挙げる、敬語は避ける） ・文末表現の統一（文体、指示や可能の表現） ・寄り添う心と笑顔で話す

## 2. 本研究の目的

本稿では、若い世代へのやさしい日本語の普及に向けた基礎資料をさらに得るべく、長谷川・井上（2021）から引き続き分析と考察を行う。前稿では分析対象としなかった、以下の問2および問3について、分析と考察を行う。

〔問2 これから、あなたはやさしい日本語を使って何をしよう（したい）  
と思いますか。〕

〔問3 やさしい日本語についてもっと知りたいと思うことは何ですか。〕

### （1）アンケートの実施・回収とデータ化

問2、問3のデータは、期限内に入力し調査の同意を得た回答を対象とする。表2に問1、2、3の内訳をそれぞれ示す<sup>(1)</sup>。データはExcelファイルで作成し、回答テキストの他に、動画の視聴順、日本人学生・留学生、学年などの情報を付与した。あらかじめ動画の視聴順で調査対象者を対象(A)と対象(B)に振り分け、日本人学生、留学生の数も各対象で同じになるように設定した<sup>(2)</sup>。無回答や問いに関係ない回答を除外したため各問の回答数は異なるが、対象(A)、対象(B)の回答数や日本人学生と留学生の内訳に考慮すべき大きな差はないものと判断して分析を進める。

表2 問1、問2、問3のデータの内訳

動画の視聴順 対象(A)：概念的説明⇒言語的ルール説明 対象(B)：言語的ルール説明⇒概念的説明	問1		問2		問3	
	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)
日本人学生	35	39	37	38	37	33
留学生	17	15	16	17	14	16
計	106		108		100	

## (2) データの前処理

計量テキスト分析のフリー・ソフトウェアである KH Coder で解析する前処理として、以下①～③の手続きを行った。

### ① 表記に対する前処理

著しい日本語の間違いや同文字の連続などを修正し、数字や「やさしい日本語」を統一した。

### ② 複合語に対する前処理

長谷川・井上（2021）では「やさしい日本語」「日本人」「外国人」「日本語教育」「多文化共生」の5語を複合語として強制出力した。問2、問3ではこの他に出現回数の多い「高齢者」「バイト先」「どのくらい」「積極的」を加えた。

### ③ 回答に対する前処理

「問3 もっと知りたいと思うことは何ですか。」と尋ねたにも関わらず、問1の「学んだこと」や、問2の「したいこと」を重ねて書いた回答が多数見られた。大学生が講義での学びを振り返り、今後の行動への意欲を改めて記した点では意味があるが、「知りたいこと」の分析にこれらの回答をデータに含めることは精度の点で問題が大きい。「知りたいこと」に相当しない箇所は、不適切な部分として除外した。ただし、以下のような「(疑問詞)～か気になりました」や「～を見てみたい」の表現は、「知りたい」という関心の表れと考え、除外しなかった。

(1) 文末表現の教え方をどうしたらうまくできるか、気になりました。

(2) 動画では阪神淡路大震災の身を守るための避難指示をやさしい日本語で紹介していただきましたが、もっと他のシーンでの使い方を見てみたいです。

## (3) 分析ツールと分析方法

本研究では、長谷川・井上（2021）と同様に、KH Coder（version 3.beta.01e）を用いる。これにより、恣意性を排除し、自由回答の結果全

体を客観的に把握することを目的とする。長谷川・井上（2021）で分析した問1の回答と同様に、問2、問3の回答に対して以下の①～③を行った。その結果から、問2、問3の回答にも問1と同様に「動画の視聴順」に関係のある傾向が見られるか、検討する。

- ① 回答の全体的傾向を把握するために、頻出語を抽出する
- ② 講義の構成によって回答の傾向に違いがあるか見るために、動画  
①と②の視聴順を外部変数として、対象(A)と対象(B)の回答の特語を抽出する
- ③ 対象(A)と対象(B)の回答の内容の傾向をつかむため、それぞれ特徴づける語が、回答の中でどう結びついて出現しているかを可視化する共起ネットワーク分析を行う

### 3. 分析結果

#### (1) 全体的傾向

頻出語としてデータ全体から抽出した150語のうち、長谷川・井上（2021）に示した問1と共に問2、問3の上位60語と各語の出現回数を表3に示す。最頻出の「やさしい日本語」から上位の語の「外国人」「日本語」「使う」は問1、問2、問3に共通する。大学生はどの問いにも「やさしい日本語は外国人のために使う日本語である」との前提で回答したと考えられる。

頻出語の出現回数とその分布においては、異なる問いの回答でありながら問1と問2に高い共通性が見られる。一方、問3は、回答に異なり語<sup>③</sup>が多いこと、すなわちさまざまな内容が含まれることが示唆される。例えば、上位2語目「外国人」で50回台になり、18語目「難しい」で10回を下回る。さらに45語目「ニュース」で出現回数は4回となる。このように、問3の出現回数の傾向は問1、問2と明らかに異なる。また、問3の頻出語には、疑問詞「どんな（13回）」「どのくらい（11回）」「どれ（8

表3 問1・問2・問3の頻出語の出現状況(上位60語)

問1		問2		問3	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
やさしい日本語	197	やさしい日本語	175	やさしい日本語	137
外国人	189	外国人	143	外国人	52
日本語	166	日本語	139	使う	52
思う	120	使う	118	日本語	38
話す	88	思う	82	言葉	21
使う	76	話す	80	人	17
言葉	70	人	66	日本人	15
日本	68	日本	64	日本	14
壁	66	留学生	51	どんな	13
学ぶ	64	言葉	44	簡単	13
分かる	61	コミュニケーション	43	分かる	13
人	59	自分	41	理解	13
簡単	57	簡単	40	どのくらい	11
理解	47	分かる	37	漢字	11
知る	46	教える	34	場面	11
講義	40	伝える	34	思う	10
英語	39	理解	33	表現	10
難しい	37	来る	31	難しい	9
心	34	英語	30	例	9
日本人	30	難しい	30	どれ	8
感じる	29	交流	27	説明	8
大切	28	日本人	26	伝わる	8
コミュニケーション	27	相手	25	勉強	8
ポイント	27	説明	24	活用	7
相手	25	多い	24	具体	7
必要	25	会話	21	現場	7
制度	23	知る	20	実際	7
生活	23	話しかける	20	話す	7
多い	23	困る	19	医療	6
今回	21	学ぶ	18	感じる	6
伝える	21	今	18	基準	6
笑顔	20	生活	18	教える	6
多く	20	外国	17	深い	6
普通	20	子供	17	他	6
聞く	20	授業	17	文法	6
5つ	19	ポイント	16	方法	6
国	19	少し	16	レベル	5
考える	18	機会	15	学ぶ	5
表現	18	考える	15	言語	5
言語	17	笑顔	15	自治体	5
最後	17	情報	15	場所	5
短い	17	聞く	15	制度	5
統一	17	話せる	15	正しい	5
文末	17	友達	14	知る	5



3つ	16	講義	13	ニュース	4
言う	16	今回	13	違い	4
受ける	16	必要	13	形	4
授業	16	勉強	13	国	4
大事	16	たくさん	12	災害	4
伝わる	16	言語	12	在留	4
勉強	16	国	12	作り方	4
留学生	16	伝わる	12	使える	4
寄り添う	15	バイト先	11	使用	4
気	15	感じる	11	場合	4
敬語	15	住む	11	新聞	4
在留	15	一緒	10	生活	4
重要	15	出来る	10	相手	4
災害	14	場合	10	対応	4
自分	14	積極的	10	日本語教育	4
優しい	14	対応	10	必要	4

回)」が特徴的に見られ、やさしい日本語について何かを量的・質的に知りたいと答えた大学生が一定数いたことを表している。

## (2) 回答を特徴づける語の抽出

講義の構成（動画の視聴順）の別（対象(A)、対象(B)）に、各対象の回答を特徴づける語（特徴語）の抽出を行った。表4-1、4-2、4-3に問1、問2、問3の結果を20語ずつ示す<sup>(4)</sup>。

表4-1 問1の回答を特徴づける語(20語)

対象(A)：動画①⇒動画②の回答の特徴語				対象(B)：動画②⇒動画①の回答の特徴語			
外国人	0.489	感じる	0.203	やさしい日本語	0.474	心	0.231
日本語	0.444	多い	0.190	言葉	0.421	ポイント	0.230
日本	0.371	普通	0.180	使う	0.397	統一	0.228
思う	0.361	多く	0.175	話す	0.377	日本人	0.209
人	0.318	高齢	0.173	講義	0.364	5つ	0.207
簡単	0.297	意味	0.167	学ぶ	0.356	大切	0.206
分かる	0.279	子供	0.167	理解	0.296	必要	0.200
知る	0.234	コミュニケーション	0.164	壁	0.254	一文	0.196
英語	0.226	気	0.161	短い	0.250	重要	0.193
授業	0.204	初めて	0.161	難しい	0.235	相手	0.193

表 4-2 問2の回答を特徴づける語(20語)

対象(A)：動画①⇒動画②の回答の特徴語				対象(B)：動画②⇒動画①の回答の特徴語			
外国人	0.424	学ぶ	0.170	やさしい日本語	0.510	多い	0.172
日本語	0.400	日本人	0.159	使う	0.447	今	0.164
話す	0.375	会話	0.153	思う	0.397	困る	0.159
伝える	0.281	交流	0.145	日本	0.361	もっと	0.153
自分	0.265	ゆっくり	0.143	言葉	0.286	少し	0.148
簡単	0.261	話せる	0.138	コミュニケーション	0.273	説明	0.148
分かる	0.231	うまい	0.127	留学生	0.254	積極的	0.140
相手	0.210	よく	0.123	来る	0.242	講義	0.136
理解	0.203	笑顔	0.123	難しい	0.206	ポイント	0.133
教える	0.191	機会	0.121	英語	0.191	今回	0.133

表 4-3 問3の回答を特徴づける語(20語)

対象(A)：動画①⇒動画②の回答の特徴語				対象(B)：動画②⇒動画①の回答の特徴語			
やさしい日本語	0.459	伝わる	0.076	外国人	0.403	具体	0.098
使う	0.279	もっと	0.074	日本語	0.295	どんな	0.093
日本	0.123	ニュース	0.059	どう	0.185	場面	0.093
例	0.113	活動	0.059	分かる	0.177	表現	0.093
漢字	0.111	指示	0.059	言葉	0.161	在留	0.082
どのくらい	0.091	書き換える	0.059	簡単	0.151	正しい	0.082
思う	0.091	新聞	0.059	人	0.143	対応	0.082
場所	0.077	程度	0.059	日本人	0.127	日本語教育	0.082
基準	0.076	使用	0.058	難しい	0.118	話し方	0.082
説明	0.076	活用	0.057	理解	0.113	感じる	0.080

問2の対象(A)は先に視聴した動画①概念的説明に関連する語、また対象(B)は先に視聴した動画②言語的ルールの説明に関連する語が、問1と同様に各対象の回答を特徴づけている。

一方、問3では対象(A)、対象(B)に問1や問2のような視聴順との関連は見られない。問3の特徴語はJaccard係数が0.1を下回るものが多く、使われた語は分散していることが分かる。以下に問3の回答例を示す。下線は、表1に挙げた講義内容のトピックとキーワードに相当する語である。

- (1) やさしい日本語をちゃんと理解しました。外国人にとってももちろんやさしい日本語には賛成しますが、日本人がやさしい日本語をどう思うか知りたいです。もし自分が先生や医者やアナウンサーなら、

やさしい日本語を使用してくださいというような指示を受けたら、面倒くさいと思わないでしょうか。

(4年・留学生・①⇒②の順に視聴)

- (2) 「やさしい日本語」で通じるので、尊敬語、謙譲語などの敬語の勉強はいらないと思ったり、敬語の勉強はあくまでも「テスト勉強」として日常生活の中で使おうという意識がなくなったりすると、日本の「教養マナー」を身につけることができなくなるということが生じやすくなるのではないですか？ もっと知りたいことは、どうやって、やさしい日本語を使いながら、本物の日本語をおぼえるんですか。

(3年・留学生・動画①⇒②の順に視聴)

- (3) 外国人には「やさしい日本語」を使うことが分かりましたが、外国人児童にも同じ対応でいいのでしょうか。外国人児童は大人より語彙が少ないとは限らないですが、語彙が少ない児童と仮定して、敬語をあまり使わない等の対応で良いのでしょうか。これこそ、教師が多種多様な言語を身につけ、その児童の言語で会話をするのが正解でしょうか。これはやさしい日本語の問題ではなく、日本語教育の問題かもしれませんが、気になりました。

(4年・日本人学生・動画②⇒①の順に視聴)

- (4) やさしい日本語についてもっと知りたいことは、中学、高校など教員にはどういう研修をしていくのかです。教員には、一律に外国人に対してはやさしい日本語を使うようにさせるのか、それとも言語能力を向上させるためにあえてやさしい日本語を使わないようにさせるのか。やさしい日本語を使わないことで、聞き取れない、わからないという点から自らの日本語学習を加速させる効果があるのではないかと。という考えがあるため、今後中学、高校などの教育現場での外国人に対しての日本語の使い方がどういう方針になっていくのか気になりました。

(2年・日本人学生・動画②⇒①の順に視聴)

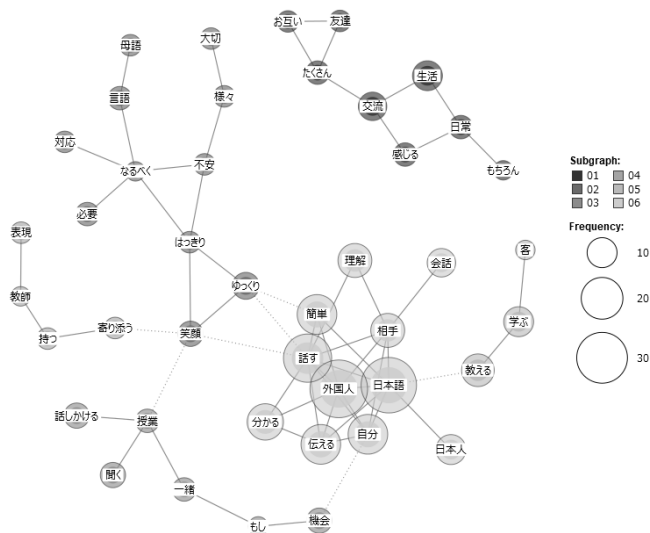
### (3) 共起ネットワーク分析の結果

前節で抽出した特徴語が、回答の中でどのような語と結びついて出現したかを可視化する共起ネットワークを問2、問3の対象(A)、対象(B)に対して作成した。図における丸の大きさは頻度を、線は語の共起関係を表す。検出する共起関係は上位60とし、「サブグラフ検出」という、語と語が比較的強く結びついている部分を自動的に抽出して描画した。語彙同士のつながりから、対象(A)、対象(B)の回答がそれぞれどのような内容であったか解釈できる。

#### ① 問2の結果 (図1、図2)

図1は、動画①概念的説明を先に視聴した対象(A)の結果である。「外国人」「日本語」が中心のまとまりから、動画①で説明したやさしい日本語の定義にあたる「外国人に分かるように」「簡単な日本語で話す」との内容が読み取れる。加えて「相手を理解する」「自分が日本語で伝える」「授業で(留学生に)話しかける」「お互いに友達になる」「日常生活で交

図1 動画①概念的説明⇒動画②言語的規則の順に  
視聴した対象(A)の問2の回答の共起ネットワーク

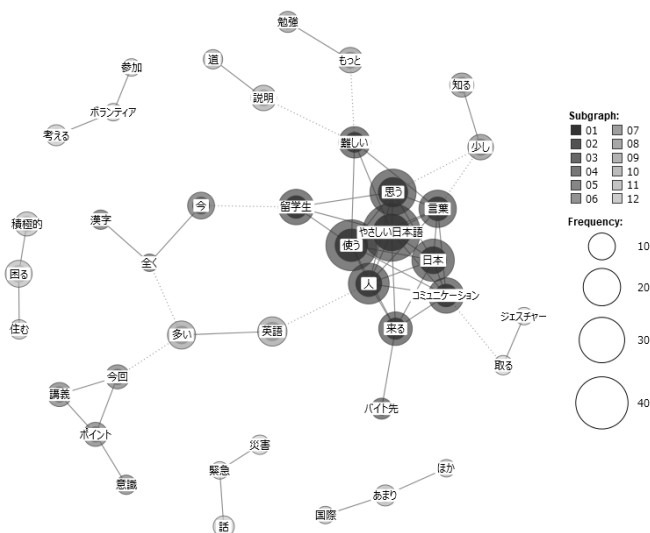


流する」との内容から、「自分に身近な生活でできること」という回答の傾向がうかがえる。

図2の対象(B)の結果は、それとは大きく異なる。言語的ルールの説明を先に受けた対象(B)では、中心のまとまりから「やさしい日本語を使う」「日本に来る人とコミュニケーションをとる」ことや「言葉が難しい」「もっと勉強する」との内容が読み取れ、他にも「漢字」「英語が多い」「講義のポイントを意識する」など、言語面での関心からの回答が見て取れる。こうした言語面への具体的な言及は対象(A)には見られない。この点では、問1の回答が動画の視聴順と強い関連を持つことを明らかにした長谷川・井上(2021)と同様の結果となった。図2では「ボランティアに参加する」「災害、緊急」「困っている人に積極的に」との内容も見られるが、どれも活用の具体的場面であり、やさしい日本語を使うことが対象(B)の回答の中心になっていると言える。

以上をまとめると、対象(A)と対象(B)の間2の回答からは、問いをどう捉えたかに対する違いが見られた。[問2 あなたはこれから何をした

図2 動画②言語的ルール⇒動画①概念的説明の順に  
視聴した対象(B)の間2の回答の共起ネットワーク

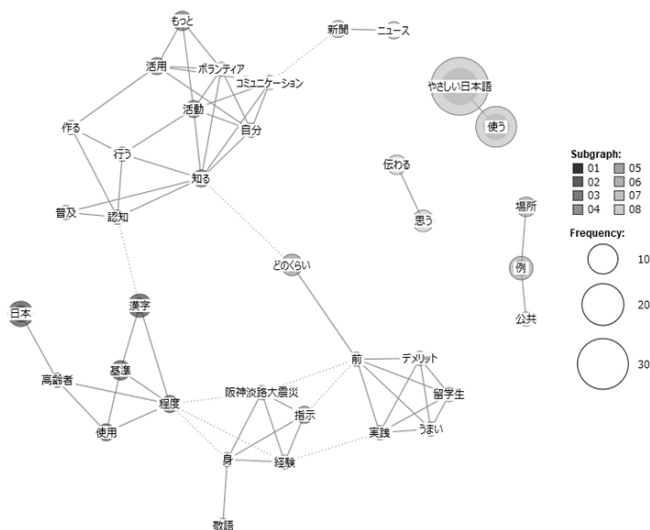


いですか。]という問いに対し、対象(A)の大学生は「自分に身近な生活の中で何が出来るか。」、それに対し、対象(B)では「具体的な場面でやさしい日本語をどう使うか。」と捉えて回答する傾向がつかめた。

## ② 問3の結果 (図3、図4)

次に、[問3 やさしい日本語についてもっと知りたいと思うことは何ですか。]への回答の共起ネットワークを見る。以下の図3は、動画①概念的説明を先に視聴した対象(A)の結果である。問1や問2で対象(B)の回答を特徴づけた「やさしい日本語を使う」ことが、ここでは逆に対象(A)の知りたいこととして回答を特徴づけている。その反面、「阪神淡路大震災の経験」「高齢者への使用」、やさしい日本語の「認知」「普及」「活用」「公共の場所での例」など、やさしい日本語の社会的背景や必要性に言及した動画①概念的説明に関連した回答も多様に見られる。さらに「どのくらい前から」「漢字使用の基準や程度」「デメリット」といった、講義では触れていない内容を知りたいとする回答も見られる。このような多様な内容を含む内容から、問1、問2の回答では関連が見られた

図3 動画①概念的説明⇒動画②言語的ルールの順に視聴した対象(A)の問3の回答の共起ネットワーク



以上をまとめると、[問3 やさしい日本語についてもっと知りたいと思うことは何ですか。] という問いかけでは、対象(A)と対象(B)の回答

**Subgraph:**

01	06
02	07
03	08
04	09
05	

**Frequency:**

- (Small circle) 5
- (Medium-small circle) 10
- (Medium circle) 15
- (Large circle) 20
- (Very large circle) 25

はそれぞれ多様な内容が含まれる点で共通していた。つまり、動画の視聴順には関連しないという結果が導かれた。次章では、大学生がやさしい日本語についてどういうことをもっと知りたいと回答したのか、実際の回答例に即して見ていく。

#### (4) 実際の回答例

ここでは、3年生の日本人学生C（動画①⇒②の順に視聴）と4年生の日本人学生D（動画②⇒①の順に視聴）の、問1から問3に対する回答を示す。この大学生C、Dの回答に共通しているのは、問1および問2に対する回答は、自分が最初に見た動画の内容に強く関連した内容で構成されているが、問3に対しては、後で視聴した動画の内容に関しても意欲や関心を寄せた回答内容になっていることである。以下に実際の回答例を示す。文中の下線は表1に挙げた講義内容のトピックとキーワードを示している。

【大学生C（3年・日本人学生・動画①⇒②の順に視聴）】

(回答1) 近年増加し続けている在留外国人に対して、多言語対応や「やさしい日本語」など生活するにあたってのハードルを下げる工夫はなされているが、十分とは言いがたいのが現状である。日本語教育の知識がない人々の、外国人とコミュニケーションをとることへのハードルも下げなければならない。簡単な文型を使うことや聞き取りやすい話し方に気をつけることも重要だが、お互いが対等な「多文化共生社会の一員」であることを意識することも同じくらい重要だ、と今回の講義を見て感じた。

(回答2) 私がアルバイトをしているお店では、留学生がホールスタッフとして働いている。指示を出す際や、情報共有をする際には今回学んだような「やさしい日本語」を用いるよう意識したい。例えば、何かの商品が品切れになった時には「(材料がないので) ○○は出ません」のように簡単に短い文を、ゆっくりと話せるようにしたい。自身が客という立場で、外国人の店員さんが対応してくれた際にも同



じように、簡単な単語を用いるようにしたい。

(回答3) 「やさしい日本語」として使える文型は初級のものが大半だが、漢字の使用に関してどの程度がのぞましいのかを知りたい。漢字圏の人々にとっては、漢字が理解の助けになる場合もあるため、すべてひらがなにすればいいというものでもないのではと思う。ふりがなをつけることは前提として、NHKのやさしい日本語のニュースや各新聞社のSNSではこういった基準で漢字表記とひらがな表記を分けているのか、とても興味深いと感じた。

上記の学生は、回答1では、概念的説明の動画から感じたこととして、「多文化共生社会の一員」であることへの意識の重要性が書かれている。回答2では、自分の経験とやさしい日本語を結びつけて捉えており、言語的ルールを意識しながらも相手に寄り添うことへの意欲が示されている。回答3では、言語的ルールを意識した内容が色濃く、文型や漢字などの表記に関する学びの意欲が書かれている。「多文化共生社会の一員」として、広く社会を捉え、やさしい日本語の受け手を意識した言語的ルールが記述されている。

【大学生D(4年・日本人学生・動画②⇒①の順に視聴)】

(回答1) 私たちが普段町中で見ている日本語は、外国人や子供たちにとっては難しいことだとは考えたことがなかったです。一部の人は生活しづらいと思うし、これからはひらがな表記を増やすなど変えていく必要があると感じました。表記だけではなく、日本語を学習する機会を作ることも大切だと思いました。

(回答2) 以前、留学生の友人に日本語を教えたことがあるが、今思えば自分が普段使っている日本語でやさしい日本語ではなかったと分かりました。今回の講義でやさしい日本語のポイントを学べたので次回からこのポイントを意識しながら伝えたいと思いました。

(回答3) 外国人が直面する3つの壁についてもっと知りたいと思いました。在留外国人が生活していくなかで、難しいと感じることや住みにくいと感じたことなど、日本人では分からないことを知りたい

と思いました。不便に思っていることを改善する、すべての人にとって住みやすい国にするために他にできることがないか知りたいです。

回答1では、言語的ルールに着目した上での日本語学習機会の必要性を指摘し、回答2においても、言語的ルールを意識した伝え方への意欲が見られる。回答3では、外国人が直面する3つの壁に対する学びの意欲に触れ、さらに、多文化共生社会の実現に向けて必要となる「在留外国人に対する関心」が記述されている。

以上のように、大学生C、Dの回答は、回答1および回答2は、彼らが最初に見た動画の内容に強く関連した内容で構成され、回答3は、後で視聴した動画の内容に関しても意欲や関心を寄せた内容で構成されていた。(3)の②において、問3に対する回答は動画の視聴順には関連しないという結果を導き出したが、そのことを支持するものであった。

#### 4. まとめと考察

本研究では、やさしい日本語の講義を聞いた大学生108名(動画の視聴順を変えた対象(A)、対象(B)の2つのグループ)の自由記述アンケートの回答を分析データとし、KH Coderにより計量テキスト分析を行った。その結果、[問1 やさしい日本語の講義から何を学びましたか。][問2 やさしい日本語の講義を聞いて、これから何をしたいですか。]に対する回答は、対象(A)、対象(B)いずれのグループも、「最初に視聴した動画」の内容を色濃く反映していた。一方、[問3 やさしい日本語についてもっと知りたいと思うことは何ですか。]に対する回答には、対象(A)、対象(B)いずれも、動画の視聴順との関連性は見られなかった。さらに、第3章で示した学生の回答例に見られたように、問1および問2に対する回答はそれぞれ「最初に視聴した動画」に関する内容であったのに対し、問3に対する回答は「後で視聴した動画」の内容に関しても意欲や関心を寄せた内容で構成されていた。このことから、問3に対する回答は動画の視聴順には関連しないことが明らかになった。

以上の分析結果から、若い世代、とりわけ大学生へのやさしい日本語の普及を考える上で重要な視点を指摘する。まず構成面については、講義において最も伝えたいことを最初のほうに導入することである。彼らは導入の段階で受けた内容を基になるものとして受けとめ、そこから全体への理解や自分の考えを深めていく傾向が高いためである。次に、内容面については、彼らの学びの深化と広がりをもたらす問いかけの設定が肝要である。今回の結果においても、問1や問2のような講義内容の範囲内の回答を想起させる問いかけでは、学生の回答は講義内容に意識が向くだけでなく、「最初に入ってきた情報」が色濃く反映されたものとなった。一方で、問3のように主体的に考えるきっかけを与える問いかけは、講義内容の範囲を超えた探求を学生にもたらしした。問3に対する回答には講義では直接言及していない日本の国語教育のあり方、外国人児童生徒に対する日本語教育、学校教育に関わる教員への研修の方法など、さまざまな観点での記述がなされていた。やさしい日本語の講義がもたらした彼らの学びの広がり、大学における「知」と社会を結びつける一歩となった。

本研究では、若い世代へのやさしい日本語の普及に向けて、構成面・内容面の重要な視点を指摘した。この両面に関して今後も精査と検証を行い、大学生以外の幅広い対象者にも、今回指摘した点を検証していく。やさしい日本語の普及は国を挙げての取り組みであり、本研究で得られた結果は、やさしい日本語の普及を目指す多くの関係者にとって意義のある資料となるだろう。

(注)

- (1) 各回答の平均文字数は、問1が222（最大381、最少41、標準偏差57.46）、問2が196.3（最大335、最少30、標準偏差57.3）、問3が65.26（最大181、最少11、標準偏差39.19）である。
- (2) 学年についても、あらかじめ1～4年生がほぼ同数になるように設定した。
- (3) 類義語を考慮する必要もある。
- (4) 各問で分析対象となるデータは、問1が総抽出語13,490、異なり語数1,246、文総数483、問2が総抽出語12,036、異なり語数1,223、文総数451、問3が総抽出語数3,448、異なり語数587、文総数242である。表中の数値は集合の類似度を特徴づける値であるJaccard係数を表す。

(参考文献)

- [1] 青木成一郎 (2019) 「天文学講演におけるアンケートの自由記述欄に対する計量テキスト分析」『情報教育シンポジウム論文集』情報処理学会、pp. 277-282.
- [2] 庵功雄・イ ヨンスク・森篤嗣編 (2013) 『「やさしい日本語」は何をを目指すか—多文化共生社会を実現するために—』ココ出版
- [3] 庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美編 (2019) 『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版
- [4] 庵功雄 (編) (2020) 『「やさしい日本語」表現事典』丸善出版
- [5] 岩田一成 (2016) 『読み手に伝わる公用文—〈やさしい日本語〉の視点から—』大修館書店
- [6] 長谷川頼子・井上里鶴 (2021) 「大学生は『やさしい日本語』講義をどう受けとめたか—オンデマンド型授業後の自由回答アンケート分析から—」『敬愛大学国際研究』第34号、敬愛大学国際学会、pp. 17-34.
- [7] 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析【第2版】—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版
- [8] 山崎恵 (2020) 『「やさしい日本語」再考』『姫路獨協大学国際言語文化論集』第1号、姫路獨協大学人間社会学群国際言語文化学類、pp. 61-73.
- ・『生活のための日本語：全国調査』結果報告〈速報版〉 (<https://www2.ninjal.ac.jp/past-projects/nihongo-syllabus/research.html> 国立国語研究所ホームページ 2022年1月30日最終アクセス)
- ・「令和元年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」 ([https://www.bunka.go.jp/koho\\_hodo\\_oshirase/hodohappyo/92531901.html](https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/92531901.html) 文化庁ホームページ 2022年1月30日最終アクセス)
- ・「令和2年度 在留外国人に対する基礎調査報告書」 ([https://www.moj.go.jp/isa/policies/coexistence/04\\_00017.html](https://www.moj.go.jp/isa/policies/coexistence/04_00017.html) 法務省出入国在留管理庁ホームページ 2022年1月30日最終アクセス)